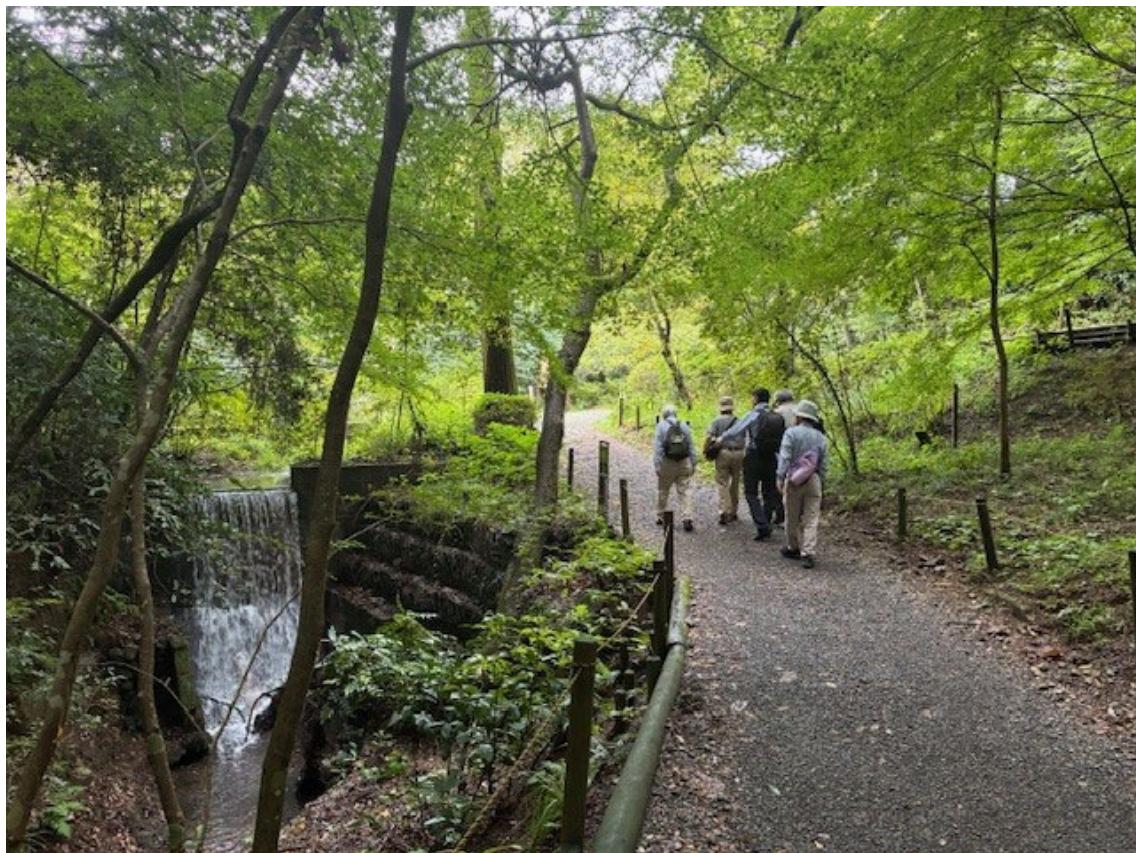


JR 線・京王線高尾駅近く 多摩森林科学公園を見て歩く

9月19日金曜日、高尾にある森林総合研究所・多摩森林科学園の見学会を実施しました。参加者は5名とやや少なめでしたが、天候に恵まれ、無事に第一及び第二樹木園とともに「森の科学館」を、楽しく見学して参りました。



多摩森林科学園の森は歴史が古く、江戸時代の幕府の直轄地に由来します。明治には皇室の所有する森林（御料林）となり、大正10年には帝室林野管理局の林業試験場が発足。第二次大戦後、農林省林野庁に編入されます。

長い間、公的に管理・保護されてきた森林であるため、その結果として、①薪や炭に用いられる雜木林（代表はコナラやクヌギ）は少なく、逆に、②この地に元来育成していたと考えられる樹種（極相種）である常緑樹（モミやスダジイ）が多い、という特徴があると言われています（季刊 森林総研52号 特集「多摩森林科学園100周年記念」より）。



まず樹木園を散策しました。現在公開されている第一及び第二樹木園では多数の樹木を見るすることができます。樹木観察ガイド(3種類のマップを入手できます)には第一樹木園内に16種、第二樹木園内に33種、科学園の付近に2種の都合50種以上の樹木が挙げられています。



園内には多数の解説板や「森のポスト」といわれる白い箱に収められた木製品・模型などの現物を用いた解説が充実しています。



「木曽の五木」の解説



「森のポスト」の一例：ヒノキの解説と法隆寺の模型



「江川ヒノキ」の解説パネル

さらに「森の科学館」では多数の標本、模型、パネル類などによって森林とそこに生息する様々な生き物、そして人とのかかわりについての知識を得ることができます。



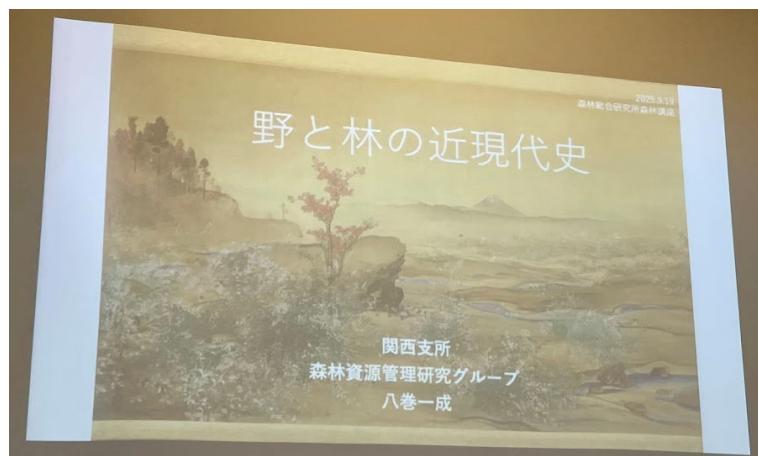


科学館の常設展示物の数々



台風で倒れた江川ヒノキの年輪：芯は1850年（嘉永三年）に対応する

森林科学園のもう一つの楽しみは、定期的に開催される「森林講座」にあります。国内各地から招かれた研究者が講師となって、先着30名の希望者に森林総合研究所の研究成果を説明してくれます。今回の見学会の日程は、関西支所の森林資源管理グループの八巻一成氏による講義「野と林の近現代史」に合わせていました。午前の見学会に御参加の5名のうち4名様が午後の森林講座も受講され、原野＝草地の歴史やその重要性についての解説を聴くことができました。



森林講座も聴講できた

以上